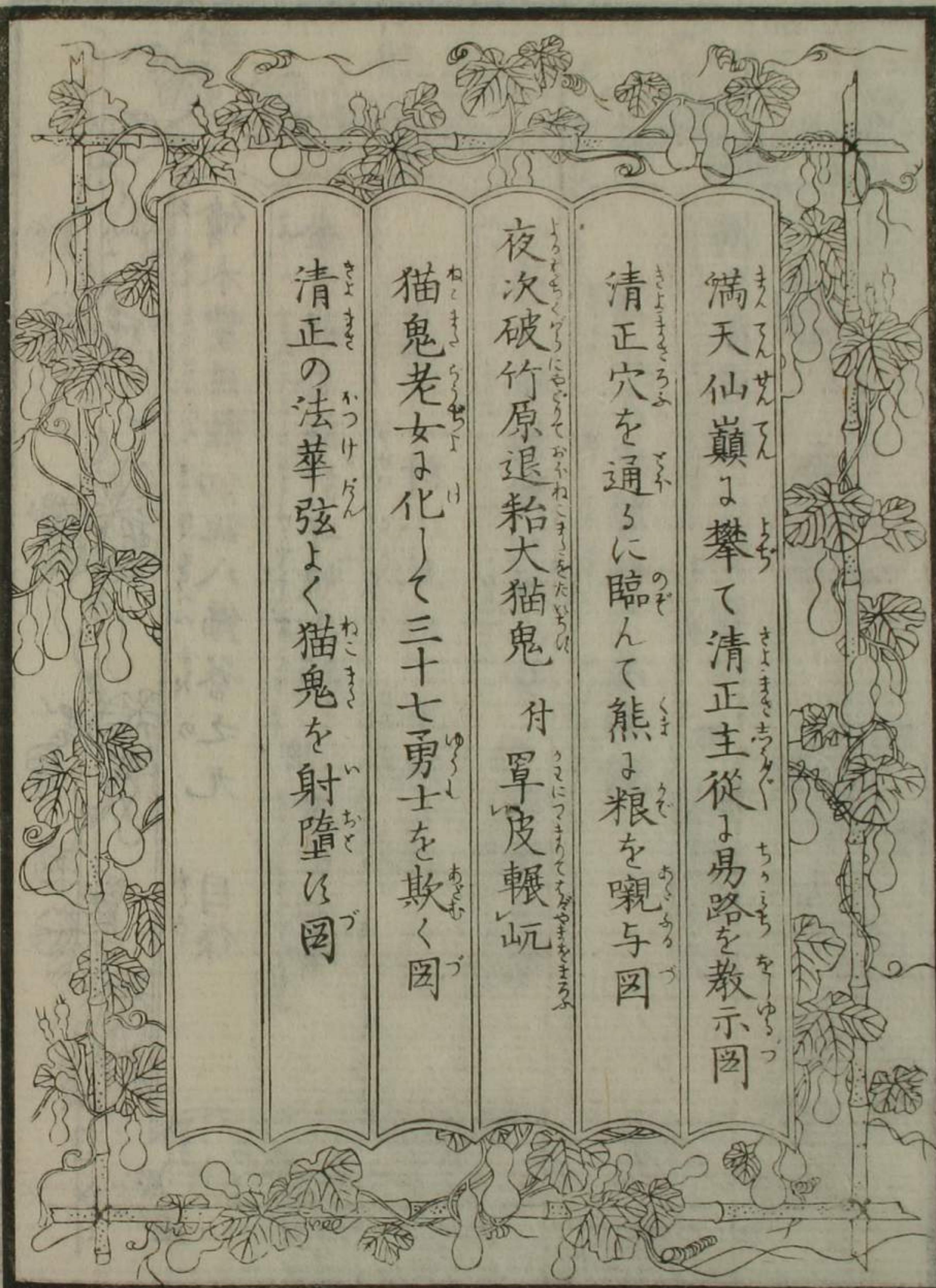


門へ遠13
2209
卷 79





繪本 豊臣勳功記 八編卷之九

東京

櫻澤堂山 刪補

金子親忠殺、守燒山城 屬

清正向晴

損ふりとべ益あらず。益ふくんを何と損せん。然べ勝とも足と利とせむ。放とくとも耻とせむ。天下全く大平治の時、又至て、然らうと。其先言と茲と縁ある。加々金子の西將へ、迎え、脅勇と施して、合戦。一月、又迎ぶといへども、稍勝敗へありあらず。よく、進退、妙と得られ。牛角は軍の功と備えて、其後の後、又、對陣するのも互に交と撃べーと。虚と窺ふて、磬くろぐ。かのへ、一斉西側へ到り。小早川は力と戦せて、快く、国土列へ入らんと。

八子余猶よりて。一夜密々小早川が方よ弛かむる。後又ハ
吉川元長が。大軍列陣一ノ夕相すて。巍々寧々と備へる
る也え。了得の金子傳名清も。あとと賄うてさへ。浩
る而向地の城より。元親の書翰も來を底ゆるゝやと。披
圓るふ。小早川隆景が勢ともて。西豫ありしる。大河
和島とも。下りとちて。甚條の小城へ頑ら。攻撃さて今
り既。本國甚太危急は近づり。然ども其路陥咽あるとば。意
煩ふとつふとりくども。偏安あるば甚朝は至り。脇を
嘴とも。遙るべくぞ。甚方へ久武は守り。セ置某方へ快
遙きて。焼山越と守るべ。彼峠へ最も要害固く。四國を
一の絶あとども。道條度く通トと。バ防禦する。又大

持の場所あり。只後彼所を堅固は守り。故と土列へ入ざ
るやう。料理べーとの使節あり。全子大はうち。驚き。備こ
そ近来敵の所見。意入るべく懷ひ。西豫へ已小早
川が。向ふて落城ふ。させん。然それば今ハ遠陣。か
後吉川二將のうち。孰何一個ハ彼所へ殺き。隆景は力と
勤める。あらん。這車と早く悟り。あべ。對陣の故と。擊破り。
吉の威徳は帰ものあらんと。久武内益助と。斯謀計の齧齧
前。の軍理より。玄運の窮達と。門禪。然して。近般若今
は。周り。焼山の城は。卦く。あとべ。是下近方を守らるべ
よ。堅く。言禪。ドつも。自勢と率俱一。焼山の城は。卦むき

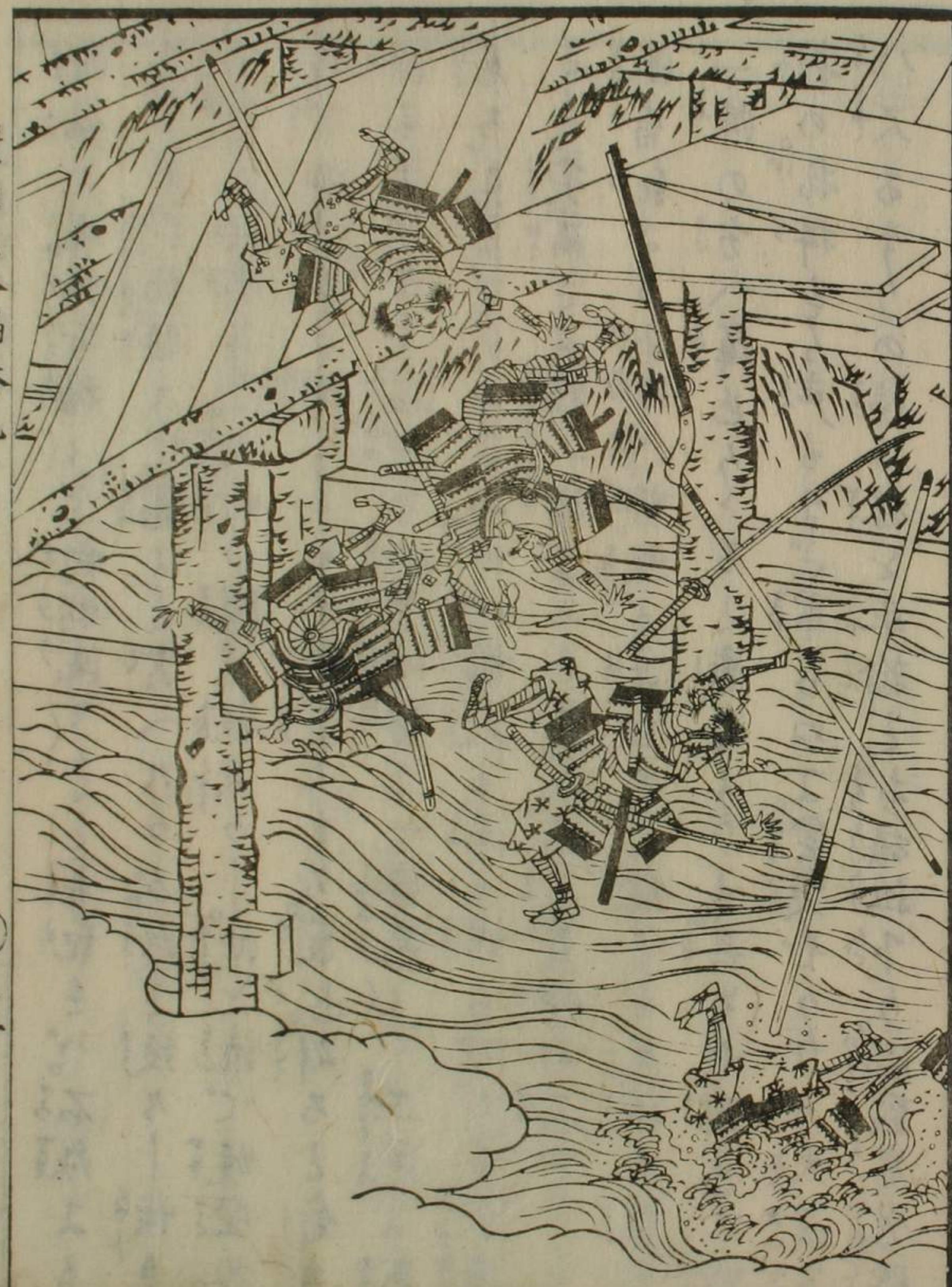
タリ。开も這燒山の城墨ハ豫忍宇和那又半面壁にて。然
して土忍宇和那又跨り前ハ湖くする百尋の深洞と帶
とし。城陥よして百折又壘り。後背ハ數丈の山重り。遠く
遠て連綿よる。その中多く滌谷ありて。底へ正午も闇夜
の如く。老樹怪石多々年輪古より根と滌ふあ一枚葉
と舒て梢下りて根と生じ。兩樹合て一樹とあり。生死
岱山と共よて斧斤と害することもあらずべ。魁麿
麿怪吳の顛ひ慢恣又穴居ある。送後温泉筆記又燒
山又ハ鬼魅ひそゝ棲と名ともといへり或へハ怪きひ山燒
山又あるハの怪あきむともつていふある。緹令羽
翼ありとつふとも容易弑ること難し。浩る怪嶺の早服
ニ。一城墨と結稱ふを。這城中より土佐へ通ぞるもちへ

ハ廣々きども巖石と低く吹平ともべ。故此布又進來る
と。眼下又見卸し。木石をもて砌ぐんと結構へようたり
要害あり。素此城と守りタリ。吉良援テ守あり。一がご
也ハ金子が陣又おいて。残死して至後の織田北向り又
在タリ大將國吉又斯帝名湯と凝守らセタリ。又金子
又守將又一め堅固又此地と守らせタリ。これ又周て
傳矣清親忠。六月七日又豫忍より。燒山の城又來着。せん
將國吉又斯帝名湯と軍議と渡りて防禦をべき謀略とも
做え。それ、閣き茲又か後主計頭清正。八子條統又
て西作築ある。小早川が陣又加勢。六月十三日の事
方到來て陸京又對面軍議とあむく譚文せらる。陸京

ハ左又右又清正と。もて大將と。指揮と領んと。辭讓
タキバ。主計頭休ことと得む。采幣探て元時も早く。土列
ム丸入あモベーと。小早川と先陣と。焼山城と。を齒
かく。加後清正後陣。又列行。總勢三万八千余騎。焼山の
城の禁ある。渓の前面。又侵え。橋塔の陣。又攻め。殺
百の馬銭幣。蒐く。單騎急。又推逼タキバ。四國勢。又根
ユ。大渓洞の橋と。後て。早くも彼の橋逼。隊伍と。う
りて。勒。開も。這洞へ流水激く。怪石奇富の船。又隠れ
て。落葉水。又雪と。轍。も。より。程。向く。深く底。又碧洞へ。
凌き。入て。瞑む。む。う。皓る。急湍。あり。タキバ。橋下。又橋撃
と持つこと。と。得。然ども火矢。又攻め。る。小早川。又。大將軍

勢。ハ。江と。鼓て。後ろ。べき。金言。も。遂。コ忘却。橋の彼方
ム。隊伍と。固め。一。四國勢と。退路。さんと。先と競ふて。狂喜
り。橋の半。よ。到ると。等。く。橋板。あ。う。より。吐炮の。おとく。
左右へ。発止と。刎返り。橋上。又。ある。大將軍勢。又。金洞河へ刎
墮されて。淳つ沈。つ。漏船。や。る。大將軍立。布。左。東。つ。大
弓。又。弓。吉と振ふて。残の。勢。又。失。セ。ドと。退返し。大將
指揮。一。二の。柵と。乗破り。十町を。くり。登。來。る。此。コ。一構の
と。大木埋。させ。其。を。や。後て。攻。登。せ。と。大。木。大。石。と。流面へ。拵。込。申。こ。セ。也。に。時。又。谷洞
一。大。闇。あ。つ。て。中。又。大。龍。一。獅。風。と。噛。で。翻。く。の。ミ。寂。寞。と
一。て。防。ぐ。べき。矣。も。さ。く。又。見。え。ざ。と。べ。叩。破。て。乗。破。よ。と

金子傳兵衛
焼山の城
凝守と轉
橋の一計
多く小早川の
軍勢と悩む



准体の塙挺お振りし。刮剥流々と歩紀とべ。石突又も
あらぬ。円明碎りて飛よと走へたり。此役殺り一怪き
防禦の兵器あり。大竹の頭と殺夫。土と清で焼墻め。
万本となく彈とうけて。積置りるが。圓明碎ると看る
際もあらせど。石炮の如き吐勢にて。彈幕々正達。又
来る。ことひぐとめ。又小早川勢。人も馬も犠らばこそ。勧善
さを実居さを瞬一息。又ニ三百人死。人負瘡の山とある。
激奮紀。又小早川勢。豈も進むあと能く。先隊の残兵
二陣の方へ。轟とうると。肴るよりも甚。もや跑と城
將の。指揮。もろ声も。まざ。畢らぬ。又雲突。むくの大漠。又
八尺あまりの。練の棒と。車輪と。お振近下り。腦頭。肩。骨。腰。

樞。骨。人馬強弱の差別。なく。扣起く。洞の岸まで退却。
結くと。一そ退上る。小早川。が先隊の勢。へ。紀是も。あく。故
支。一そ。當日も暮。よ。逼り。と。バ。軍。と。退。收。結。陣。あ。モ。今日
残死負傷の。名。五百三十人。又。近。ぶ。これ。又。因。て。大將降
景。最。悔。憾。く。お。も。い。と。り。ゆ。え。家臣の。門。く。と。聚。め。ら。と。
唄。西。停。豫。あ。大。列。字。和。曉。其。外。移。の。城。と。攻。拔。今。此。燒。山
又。當。か。り。此。放。北。又。逃。ぶ。こと。へ。加。後。若。有。る。又。よ
つて。意。狀。ミ。ー。と。お。も。ち。く。も。面。目。あ。き。次。方。あり。然。り
と。り。へ。ど。も。残。ふ。ご。と。よ。勝。こと。だ。く。あ。る。ふ。も。あ。う。ぞ。
孰。者。が。這。地。又。牢。城。一。て。浩。ろ。防。禦。の。方。使。と。セ。ー。ふ。や。擊
て。出。づ。る。大。將。へ。甚。名。と。号。ら。ざ。り。た。う。と。了。得。又。智。勇。

の隕京も僕も一懸まで同じたり。桂立弔たまつ脩。今日
合戦の始終と仔細と言狀あしりをば。隕京軍て要時沈
吟。いづにも役り一防禦の方術へ先達て稍方量と武
置。金子傳名勝が軍配又似たり。且つおてぬる秀將
大漢士ふして練棒と使ふといへば。正しく熊谷勝直ふ
らん。渠へ今措大例に又在つるとおもひ一ぐ。誠ヨ不審
の次才あり。這上へ清正は揮儀もべーと後陣又到り對
面せらむ。合戦の相と門繳る主計頭あきと聆て。いづ
も浩る防禦と計る。金子傳名勝の外あるべくぞ。今
既本國免く一て。絶而と拒抗の期又逼り。吉川の方又察
量と付て。遠城へ來る又相違あるまド。又ふくく不思

議の良将ありと。つよ隕京。响も傳名勝と察して。進
退のふを。あをべきふやと。稟をと清正今我快と地理と
秀るふ。此焼山の城。よおいて。客易。又攻拔ことあり難
い。然りといへども。遠方。よ来。砲り。焼山の城。を攻ぐ
と。別路を通るも。憾念あり。响。焼山の後背へ遠り。壇
の晴弓。よへ煙を立べく。彼。又近びあが火と冲べ。晴弓
放。矛。よ面方より。急勢ともて攻逼至え。响。城中。よ火と
放て。金子と擒捉方術をそべーと。まよ祀るやう。又稟さ
せり。也。隕京大。ようち。驚き。其。清正の方。竟あきども。
いとく。免ふく覚えひ。我も。主教を。あきふ。あうねど。
此城の背後。ハ。後害。焼山。つよを。うり。あー。只。あひより。攻

投る。如ベテラとありトふと。清正頭と左右はうち
觸。些も意と傷めとまふ。咱存分は後悔と破り。做果を
ベーとあり。りんやえ。隆景強て止めぐ。然まで懷犯
あとあくば。いろふも令ヌをふべー。かあらぞ晴等と待
まささんと別辭と告て陣所は帰り。約セー如く面方よ
里。攻入准備専一あり。時ニ清正徳勇士と呪襲め。後路
攻の網と門禪り。雖余多勢ハ寡あるべり。三十人を
うちにて攀跡るベーとあり。りんふぞ驚くもあり。號も
あり。有妄の返答あき中より。表本儀太夫庭ミリで。君の
令ヌいひえども。咱も快よりそを意属通路と穿鑿つる
まつる。城の背向の連山。渓深く嶺峠。圓羅の支

セテ。導示と知らず。大持の御身はまく。ふぐ。浩る
危き而向をだ。別路と通りて攻投りとまづ。上分別
はへひらひをやと。稟を。滿座の個くも。祠とそえて同
壇せり。清正游て田さく。ハ。海絶ゲ殉陥よく。理あり。
然どもそれハ尋考の而存あり。山へいろあど嶺峠あり
とも。食を地より被り。物ふれありぬをば。翼あくとも
登得つべ。別て近來流語は所べ。山術は接めろ。女呪の。
害とあもてよ物あるす。あり。咱居余と蒙りて。四國と
征伐あーつ。事長考我のと股ちるふあく。四國の
民の祀居往來と安う。めんくらあく。ぞや。咱豫て
よう。聆信する。法花の功德もこれよ。歲。小年ともて未

むべらうぞ。唯大素と得采セよと。至も教へらるるものと。
努力く懈怠をベウラズと。眞理ともつて睨着ルとば。徳秀
士あらんど感彼アリ。浩る大義の懷起と。いろでう意り
まをもべき先に津保つらま涉らんと。蘖起てぞ准儀ニ
近ふ。清正俱役の個ニシテ。麥本儀太支正虎奴田覺名清
成木村又藏童勝井上大九郎宣成齊夏候豆入送隱本
者星太良名清正辰龍平次正奇。小城下總清長庄林隼人
清象柏原益ス弟包冬脩萬支不齒の櫛勇士。主從玉づる
ヨ三十九人薙嘴大渾大誠纏幅ス又の大猿又ハ末と本
とコ太き柄とつけ。細索鉢繩索梯子。或ハ索沟大湫長渺。
二斗饗の台程連二口。名程采ハ第迄。五斗收五囊と一

個齋と。ことと七解持セナリ。一人の多木にて十日余と一
水も渓谷の流。毒氣あらんも料らとモト。四斗
桶。井泉と専入。又桶と重ねて四本の竹と柱。よ立。こ
と小緊と結みて。斯の如きと三重持セ。池田礪の佳酒と。
割持て。もの。二斗。收彼。將姫も亦人數。よ多。十
日分の飯と。甲冑弓箭。馬院へ一策。又ふ。一てあとと
も荷をセ。猿牢衣小鞞鞞。各。身軽。又打持セ。當日ハ
七月初の八日。いも。ご。波。さる。元月の未申と。輕き。頃。も。
候。も。よ。戊。亥。あんね。ベク。也。月。又。行路。と。助ら。と。底
計。も。あき。山。又。入。一。大膳。不。款。の。舉。勅。あり
加。爰。主。役。難。向。曉。山。背。属。屬。鷹。鷺。鰐。蟹。

各長むる所ありて止る所と知る者へ。宿きふ居て危ふ
くも低きよ在て軍一くるを。如何でう深山幽谷よ入
とのふとも昏迷するの所謂あらんや。然かどよかつまく
針頭清正は三十八人の勇士と伴ひ移々入とまつて陣
營と脱出。山の岬と东南の方へ斜々登ること三里十四
里所許にて此とさき一の家あり。まづ遙高峯へよぢ
躋り。磁石ともつて度数と量り、齒歎へこすよ且休めん
と。一日量の各種と腰よ属て齋くりやえ。これと喫して
眠よ筋み吏の首とおがりき時頭よ清正巣く目と覺し。
傍右と看どべ。小城下總既起舉て岩ふ座り天よ向ふて
君然と何やら考へ立る相あり。清正は視ていうよ下總

咱も子よ同ちんと欲じて起つる。蓋くも夢の覚つる
緯よ頑て子の天文地理の博識なり。今此地より焼山の
城までへ安敵兼程ありつるやと訊よ小城砦き。呼商を
セ東南の峯よ中見る中天の赤方の中よ故美星あり。彼
星ともつて焼山城の中心と見るものあらば。天の度數
と地よ寫じて次第よ山の地理と度る。翼ともつて鞘
るときへ。三里よ足らずとり一ども。上下の度よ
合もとば。嶮峰およそ十丈もあんねべー。然をとみ星と
定むべー。然されば七十又六里の跡ふにて木と伐りと
輶きの費あるものあらば。山二座ともて一日路とせん。

然まる。响へ今日より。七日と経て。十八日又ハ城又入る
べ。城多々其日ともて。二途の鬼と化失あん。公を
法光と信じ玉へべ。よく盂蘭盆會の讀經と施玉へと
吹笑ふ。清正も共ニ興と催し。呼喚快くと放矢する
その声。三十七人金剛と見る。起舉る時境遙南の方
あり。曉天報る雞の声鳴くとて。听えりとべ。備ハ初方
よ。山村ありと覓ゆり。快く辞んと服室あり。まご曉星
の曜。く頃此峯と辞出て。雞の声と導揚。漸く一箇の邱
よ歩ゆ。清正布地又邱長と呼出。うづ一刻の書簡と
紀得邱丈と清て隆宗が陣又發る。これハ清正七日と經
て。十五日又ハ城中へ攻投べきと告ぐるあり。荐び

邱長。ようち芻ひ。燒山の後背へ出べき路ある。人よ遂示
セよと命令。トクとべ。村長報消をうき。よ候き。斯ハ怖一き
令り。遠山城の後背までハ何百里ある。路ありや。それ
さへある。軍勢て。偶く登らんとする。軍あき。懷帽
天狗あと出て。登るべき。篤決して相あひ。下。導示す
う。手わくも縛へ。敵させ。へと。抖く。逃げ。清正
隻頬。又笑を作り。勇士あき。怖る。山ふき。ば。仔脩。グ。然ま
で。ふりふも道理あり。浩る。山中。よ接車あき。定で。樵夫
獵士あき。然それば。山嶮渓岨の難取と。後り別。くる。車
多き。人。俺们。一。車。左。る。う。へ。懷帽天狗出るとも。あ
ど汝脩。又。嶮難。さるべき。意惱ぞ。て。導揚せよ。家の。費事す

コモチヤル可の斧锯あどありぬベクシバ。各それと持
齋セよ來日望の遠する日へ裏表多く祝ふべーと。仁信
ともて言御れ。三十而後の壯士輩と二十餘人近出させ。
このものどき。這民軍と先よ起二里半あまり登るほどふ。山上吏ユ秀
えざき。霧ヌや雲ヌや降りぬると瞳と脛て雪て行ふ。
株の綱一面ヌ張遍く。それ亦拂へと木の枝にて拂
べ。足は薬翁て。繊膠より黏着強し。斯の如く張遍する
也。と。凡てみ町ありて。う。拂ふ。苦もあく此布と通
誠。やけば焚くと。居長老樹の牆と編ぐ。如く。て幹よ
り幹へ。次第に穿込道と並べ。相ふして。些も通ずる徑
あり。昔ハ遠隔ぞ伐闢けと。木村井上兩人が。直徑三尺の

大砍と輕相ヌ槍綱。右と左と起分を丁々と。根伐と
あき。赤星を布。勝沟索とつて。三丈許ありて。枝へ轆
輪と。投轆あれ。根毛腰。太繩の端末と。挿み。かの鉤索
と。も様あぐ。傍くと。樹はよぢ登る。その速き。あと。觸様
ヌ。又あく。を容易老樹の半段。上り。挿み。太繩の
脛。より太きと。樹は。拘る。及び幹と下んともる。怪。や
天狗。よやと。上方と。寝仰せ。最怖。一。き。轆。が。及び。轆。轆。轆。
て。赤星。を。獲。ちん。と。掣。降。ると。遁。一。ハ。セ。ド。と。掣。も。も。及。ヒ
キ。天向。ヌ。斬。拂。ふ。太刀。拂。ま。を。轆。が。復。轆。天。交。斬。壁。セ。バ。
轆。ハ。轆。ら。を。大地。ヌ。墜。下。ある。主役。三十八人。做。く。

と拳湊をうち。太布名清速くも樹と下り。隨セ一撃又
は目も離さず。太繩捉て牽立キバ。咱もくと三十七人。啖
啖声ノテ牽立る。木村井上兩人ハ已根も十分。又洗ノ
ミバ。齒徑立尺の大猿と本末把て抜けたる。且。裂滅く
と乃孫て有孫の年老怪木也。山告表ハセ倒セ。此樹
の猿は怪き祟あり。船平次走避て。結集推分。二顆の卵を
搜出。左とば其色炭の如く。大さ鉢。又額ノテ。りつあ
る鳥の卵ニヤト。つふ陰もあらず。セモ風捲想。樹と折枝
と樓碑て譽焉ある。こと。舞靈。よりも物製。胸翼と脛
展て五四頭の蟄角。同齒て捕急。遼响。大海清正ハ最初の
赤星が舉動といひ。今も卵のあるとあるより。備ハ此辺

鷹の群集。山あらん。親弓虫あば射てあとさんと弓
弓弦懸矢と接へ。待とも知るや知らざるや。船同前て捕
鳥と清正得たりと引絞り。矢响強く。地放セバ。裸とぞ
一て左より右の眼へ射抜たり。こきよ綾て井上。木村表
本。後田富翁。赤星。小園。庄林。小城。酒匂。柏原。棟置。くと
お揮。くと。ス頭の撃と。表き簾。一。捨て若もかく刺止
り。中よも赤星を。布名清ハ。好で悪食と。嗜く。口え。戒刀
引掣鷹の肉と。般取食ふて。試る。又。練の馨と。齧がおと。
斬てハ嗜むもの。よあらざと。各風羽と。引脱て。矢羽。又セ
んと收拾。這而ヨテ。年後と。喫。一。酒肆出ノテ。百姓ふ生
めて。飲。一。下總。若び。磁石と。捷て考ふる。此より東南

沢谷と遠りて往け。ありべーと。草をふ。おののく。豫然
待極登録。ふぐ。捉げ枝と拂ひ草と剪起。巖とまろを
例。う。杉木と改去。く。凸歩凹行。進むかど小猪猿狼
鯨の比類へ見もせぬ人の來るよ驚き。己が接窓へ遁寓
と。赤星猿。うる。ハ獲物。一。て。轡の胚続。さんと。背は負
う。うち流推。推り。山の木脇へ逃登る。又力をくりの熊の
脾。脛。よ擊。あろと見え。うる。げ。続ふも。脛を。ぎ。負庚の熊へ。
禰。て。遁。」。て。遙。陸。よ。赤星。因。而。て。眺。看。と。を。布。名。清。得。す。り
と。碎。年。と。排。張。縦。さ。ば。鯨。の。素。頸。投。て。足。下。よ。躄。屣。綺。拳。ふ
て。二。三十。か。ど。連。丁。て。抱。べ。猛。暮。一。大。熊。も。七。の。孔。よ。り。血。
と。吐。出。し。膽。く。も。其。采。丸。で。夕。赤。星。大。よ。う。ち。よ。う。こ。び。

夜分の珍味此上あ一と。こづく姿負て行不とよ山谷
の圓周りくる。中よへ丈縄の蛇根松豆より縛り頭よまと
ひ。繪よ此辺へ蛇谷ともいふ。傍あらん歎漸く谿疊を安
らす。向面へ百尋の絶壁巖た右へ千尋の深谷左をば。
上るふも下るふも。翼あらとば行こと能をば。斯へいり
ふにて後るべきと各目と因と観合て。大息と吹てぞ悶
然たり。三十九人が其中よ。庄林隼人あり者。これ
の者小」て。険阻を傳ふの妙を得ときべ。拘索犯て嵩替
のよは抱懸身と跳らせて砲拳る。芳らドものと赤星も。拘索
頂よ攀躋り。拘索をまく櫂卸。蘿の附る太繩と掲揚。

これよ個くとうち載て施揚こもろあどよ勇士のひとく三十七人山民輩二十人と食悉く施揚へり。あとより峯と傳ふて徃こと。二里半をうりありりうる。此際へ都て帆山あきバ。樹と伐拂ふの苦辛ハあらど。石と跋去巖と例へ行く左方の傍とあるふ谿源ふして底も視分ぞ。老樹の稠なる木の際濶又水音幽々听えらる。當日ハ七月の十日あきバ。冬々天殊々焦るが如く。熱さゆほうぬ水音の最焼へふおもふ経よ不斗谷底とあらせば。席と返生を怪しき物あり。個くあきよくと捨。爰と止て見る際。その走ること築の如く。遂よ席と捨えり。餘念もあげよ。嘯ふ相。汲轆のやうよ房也。

とも。大あること一丈八九尺もあり。人。怪の物よ撃止んと門に弓矢推挽て。込換へく撃出生セバ。谿の炮煙充満して。腰脇うち相。雲霧の如く。忽地怪異と看失ふ。其の下城ても捕よセよと。各表帶減繕へ。蔓木の根よ根筋にく。草くも谷底よ下犯胸をこ。煙の薄らじり。其の下城ても水へあうて泡起こと。茫然淡忘の積るが如く。輪邊足ハ留まらず。本財泡よ没へ。大將清正儀と沈吟。腰よ属する葉首より。向猿の油と取生し。によ。嶺で喰のくを。谿半分ハ泡消て底の漱る流水まで。秀分ることを得ことども。檜瀑布あらんと覺しき所へ。黄むか赤く或へ青く。又色よ晃く。は記して。最も視頗ぐ。これ

鹿の苦聲と
聞く清正主従

三十七人谷底ふ

鬼蟹と屠

らんと欲も



ども彼怪物ハ那各ある。泡の裡ニ潛窓有るべし。擣得て
也の結柄ニヤんと。木村井上赤星船殊の中へ跳投んと
を。主計頭松推止。らあを端て弓矢ベクギ渠怪ハ定
て巨蟹有るべし。初発敵テるを既ニ甲殻有りたハ碎け
く。船も火薬と強ふにて。擊疎セよとありたり。也
乞意得ギよとニ十七人。而因ニ余る解院と。強薬ヨ一
味配中へ散く。又警邊。今やハア有る。怪矣变化も。微
塵ニ有りて損するあんと。寛塞耶頭の空中へ虹の像
き氣冲天。一山と起ると空る隙もあらず。せむ。山岳一時
ニ呑み。孫りて小石雜交の海降出。噫。恠。一ノク。然モテ
モ。人ハ万物の主。そ。禽獸魚鼈昆虫龍蛇。八方四手の

部類。ありとも。かど人写不勝るべき。方僅を速れ豫あま
ふを生ト。それ擊捉の大將の烈。き。持揮ニ井上。木村。飯
田。森本。船赤星。响考らトと。沫と格去端邊。二門。ノグ。撃
超。大太刀大祇雙手或ハ隻擲。吳に同声。ノ怒喝。ノテ。走投
走投。尤右左く怪矣。又突齒。ノリ。備。こそおさん叔。走投
と。木村又甚激憤。ノリ。渾身の力と腕臂ニ極。十六貫同
あり。と。り。ふ。渉の幅超。ノ陽叫と。投連繩。ニ三十。擣。ども
ノ些も碎。ノ。子得。ノ。縫。又。縫。も。お。縫。きて。大息。と。次
赤星を。穿。赤星。清。大喝。一声。四尺。二寸。の大左刀と。達摩。ノ持
て。目口の隙。と。全剣力と。鴉徹。セバ。石と。裂。如。き。考。ノテ。又
尖。一尺。四寸。す。も。突。投。と。ころ。と。彼怪物。年。ニ。や。あ。ノ。ふ。や

翻へ一て赤星が。太刀と摑むと覺ゆ。奪はれてハと柱ん
と走るうち。掩唾と太刀と正中より。砍抗するハ肉疎あ
るべし。左筋も清鷺と逡巡あり。戒刀掣て刺投んとモ。怪
物をやく肉疎と歸りて。赤星が右腕と必至と撃て勧う
セモ。斬へ博る。また太刀とさへ撃次ぐる。残き刃先是絶
袖の殺交限ありと。引んと一ても搖らさたこそ。而人力
とも惜つべし。毫や赤星隻腕と。疎隆させもやまとと。看
陸不表本を惹り。肉疎の肉樞根と残もて。咄と声うけて
撃薩を。然ども肉疎ハ放毛やまと。赤星青息吹出し。表本
又恩と紛一早り。足踏ろけて肉疎と掣裂。幸くも腕と放
一つ。挾まきゆる痕と見てやるよ。血へ墨紅一うど。縫衣

の服練牢りりりとバ。腕よハ痕嶮ハあくわくり。あとふ
も怪手を赤星が。雷の如き怒声と発す。咱と恠一つる
報ふ。方僅見よ。尔う生肉と喫ふて秀さんと大活満て。揆
若うんと走る。足四又本振落。甲と足との際と板斷。
残の三十七人ハ。甲背よ上て擁せらるもあり。八臂と搏で
板切もある。中ふも赤星瀑布の如き汗と流し。奮力怒喝
をるうち。難しく四尺板切たり。暴叉の大活も。歯
三回抜板折たり。甲と梶ん個くと。三十餘人ハ憤是怒
し。三回抜板折りもありとおが一き。甲殻と滅埋くと。擊破
どり。鬼神粗猛の蟹蟹も。今ハ慚く魂絶て。精肉とづくふ
搖くのをあり。加夏主従立集て。弓と推縛。甲の徑と重武

きバ。一丈六尺三寸すあり。右八臂。兩腕の長と量バ。肉筋へ
八尺一寸五分足ハ六尺九寸すあり。面額の發三尺餘あつ
て。その強きあと減の如し。肉最も柔耳ありとて。赤星火
熟ニ迄だべ。ことを喫ふこと太甚貴目あり。左右ニ
全く日も暮りとば。四面の木と伐り移しく燎炬と焚セ
赤星ハ彼蟹夷を清正よ言狀にて天下平治の時ニ至リ。
昔活の種ふやんと。雜器と共に拾收大將今宵ハ此辺頃
又夜と明さんと。彼蟹と烹て燶とあし。酒敢交そニ赤星
も召のをど捨獲。熊と屠て羨と一つ更闇るまで笑
興むる大膳ニ属隨え。山民輩ハ強ニ忍しき勇士達よ
と。身の毛と豎て。うるひ裸き。挽る酒も喉へ通らむ。疎却

て伏一在う

滿天謝恩導三十七勇士 屬穿行無穴

蔡謨が余雅と然後セぞとも。武火よく羹と煮る。嗚ハ。從
令巨鬱棋と食ふとも。いづくんぞ其毒ニ逃れて。吐下委
頗あることあらんや。茲ニ怖ろべき蟹鬼ヨリ。吳俗の
蟹鬼と呼ニ。外見多くして内す腸アリ。は裏の雌黄毎ニ
塗ることと失して。お照壳。胸上の戈甲常ニ壳と覆てもつ
て核行をとりふ。然ども蟹の多足あり。核の多足ニ如
トとて。揚雄ことと禁り。弱き物ハ世と害セぞ。世ニ

害あたり。身ふも害あり。自己強き。辱る。とて。蟹鬼の
此。又害せらる。も。各自業自得。も。あん。余あど。又清正主
従三十人。這次洞。又休足。一々。夜も。稍五更。又近き
頃。山廻。又や覗く。と。樹巔。と。ひ。て。其を。殆縫。うり。一。が。清
正。醜くも。同と。瞬き。新ハ。尋常。あらぬ。有相。あり。偏。や。晦日
退治。あらう。蟹鬼の仇。あるもの。ふや。あらん。と。同と。瞬
く。現出。あり。備。こそ。怪物。ご。がん。あき。と。太刀。の。灣本。推窮
げ。瞬。も。セ。で。視る。うち。沈然。と。一。安近。き。清正。グ。茶。又
躊躇。て。茶。一。再拜。あ。一。老。然。から。声。と。もう。一。て。哨。ハ。燒山
の一。老仙。老満天。とい。一。者。あり。今日。神。おの。ちう。と

もつて。明日。よう。君。傍。が。一。洞。の。眷属。安眠。乐居。あ。一。ま
を。其。鵠恩。と。報。やん。こ。め。身。不。換。ぐ。と。き。一。塗。あ。き。ど。も。公
よ。覆。り。ま。か。も。べ。一。あ。き。と。御。身。又。附。玉。り。一。水。中。最。も
安穩。あり。う。あ。う。ぞ。奪。き。せ。玉。ふ。あ。と。て。袖。の。内。す。り。筐。把
虫。一。中。と。用。て。祝。セ。ー。も。る。ふ。黄。む。く。る。紙。又。燐。灑。と。三
箇。の。懸。曇。俗。は。梵。字。と。印。一。く。快。と。観。子。て。推。裁。き。恭。一
脩。あ。清。正。ま。そ。く。り。ぶ。く。一。ミ。快。と。観。子。て。推。裁。き。恭。一
て。あ。れ。と。襟。中。又。收。り。威。儀。整。ふ。て。向。て。い。へ。ら。く。貴。老。ハ
原。來。人。あ。り。や。物。あ。り。や。波。天。左。右。と。顧。て。哨。ハ。次。中。の。生
あり。一。然。の。こ。稽。を。と。正。ふ。べ。く。一。ぞ。今。足。下。又。轍。ろ。あ。と
あ。う。七。里。の。際。ふ。一。そ。一。危。駆。の。あ。り。其。あ。と。行。五。と。

うへへ。是下遠ふ害ありまド。今りふ経石と看セモふさ
んヌ。先咱棲る高峯まで來らまアヤとありタシとバ。小
城下總も傍より。これ究竟の枝助と得テ。快く帰向ま
一キモベーとて木村井上喪本脇。三十七人一齊ニ彼老
仙ニ伴を以て。一の巣ニよぢ躰モバ雅ニ構えテ。蝸亭
あり。波天四方の塵うち掃ふて。清正主従と廳上ニ諸客。
時あるざるニ柿栗と食一む。甚味最も喬耳あり。晌ニ波
天峯下ニ指一。此燒山ハ怪像と首と有。土佐と尾とも
怪山ヨリて。原來大木の精などば。富石多くハ桑鞭有
り。开も此発始と推て。瓊バ神世ニ最大の桑の樹あり。其
本豫列ニ漫て。此と唐士より傳る時ヘ。日本一槩彼桑。

樹の内あるとモテ。古朝と枝桑と喚ヘ。もうと東の文字
作ヘ。朝日と彼木ニテ串きこモバ。東字の縁故を記るふ
る。彼桑陰とあモニヨツテ。中國軍ハス穀とのらモ神達
平生ニあモニ愁て。蘆鷄草薙日不合の尊神。彼木と遂ニ燒
倒一テ。万民の苦と救セセシム。這東豫豫より。其後ニ倒
セテ。幸ニ往來の橋とある。これと号て美計濃掉橋とい
ふ。と。うや枝桑木ハ種及取中より多く出るをよ。又木の
うち木月あらニ。温原谷陽若の上。其根次第。又根と云
大荒之中有各日温原谷陽若の上。其根次第。又根と云
有根木。木根は度の左也。有根木。又山海經云云
へども。根殘て巖山とある。是木と燒て山と一々と
燒山の名と記一。あともつて。岩山弱。又燒山。



の城廓へ一夫これと守るとも。万將放ることと得を。前
面へ嶮岨と窓よし。後背へ岩石城くとじて。十四峯連立
一々色ば鬼神も越るよ易いとセむ。稍待てへ東山よ旭
日昇らば城の後背へ出べき路と導き路をへーと。霎時清
縹としてうちよ曙色輝くとじて。碧天よ暎ト。世界全く暗
らうあり。時々波天様例近く進み出西南の方よ指して。
呼焉セ此峯より。二面よ幽ろ一峯へ當連よーて。草木汁
と植るぐ如。這一峯と超る物ハ。天狗鬼神の外へ得あ
あ。ト彼而ニ一洞の熊崖あり。咱指挥あさば渠脩へミ
ア。一時ふ退散あーつべー。その一崖と东南へ一里計り
通哉あバ。被竹原とりよ鎧洞へ出べー。是燒山の中心よ

一て年齢二千餘歳と經る。猶鬼の棲らふ所あり。最も猛
き物あそば。うあるをく。剛断ト玉く奉ふ。佛力の外ある
下達の大敵あんぬ。渠と退転ト玉ふ。佛力の外ある
べううぞ。それより西ふ二三峯ハ只蔓の乱滿して
斧斤も容易斯ること能はず。その嶮岨と詔んす。被竹
原と三里を東へ遠りて。屹山の家を登り。其嶺下る
ふ一の術あり。これともつて降り玉へと。廻と翻へて
谷際まで到り。二個の壺子を羅ひきくるものと擔をせ來
りて。清正主役又祝へて。蓋把去て内と表せば。數百枚
の獸の皮あり。油天若び加茂み箇ひ。各々其身よ此皮と
替。彼屹山の絶頂ナリ。輦落玉ひあバ。其身よ病も薬を

雙田記八編卷之九

卷三

彼物へ此物より卑卑と。卑へ咱は服たり。然ども國子の害を除こと。ナリ。名稱が將軍のキと備び。國土安全あるべからざ。努力く遁る事ふあと。りと声のまご耳根よ残るふ。老僊の身へ勝敗と。日深の如く消失す。清正主徳天地と拜し。もき教と象るものう。誠よ天神地祇の助帮て。君臣よ忠義ふ。和光同塵。玉ふかん。吁麌有(か)一げふと。確讐くく縕紀こと。纏りあは。は時小城下織へ。程沈吟してあり。くるやえ。主計頭これと。騁り。今神仙の教ゆる所へ。母子が意。又合えざりやと。紙。又下緒。否。又あらぞ。不脅あきども。小臣。又最初。ふ言狀あつる。而と頑め付合せり。咱その被考へ。越る。越るところ

て容易峻岨と越よあん。猶其跡尚よ大蛇あつて。然ども豈
下俯絕倫の勇士よおへせば。怖畏べきこと有てあ。既
み城より三里の遠方。其下よ一帯の大激洞あり。これ亦
一岨の大難ふきども。最善縫げし神符と信じて。水と波
らび云半あん。燒山城の幸若とゆい頃め斯の如し。
嗚今斯まで足下達よ。力と副て扶助まること。叙ふもす
綱と舒るが如く。遠身の安穩快乐を得ことべ。其鞍恩よ
あるあり。その所謂いクンとおもとつゝよ。名脩ら眷属
十二個あり。尙よ明日足下達が退教しむ蟹のこゑ
よ。又個余と奈モアリ。其と計らモ勇士の技よ被大歎
と滅シとぞ。外よ巣とまる物ハ。只破竹原の構あきど。

の嶺各おとねへ。十四又よとおそ稟もみーつを。其嶺因いん帝だいより宥ゆうえざ
きども。一景けいうああきを一氣いつきと生うき。是そこを山やまニ主すあり。被はあ
す。其主すふすて。歸かることあり。今いま俺わ们めんニ教き示しと授じ。老お仙せん
仙せんへ多くハ齋さいの老お。ああらん。自じ号ごうて滿天まんてんといひ。つる
が。漫まん齋さいともふふああぎの臺だいあり。四國しこく小生こぶもる齋さい。小おひ
てて。鬢ひれ十二じゅうにありと聆き。これと眷屬けんしょ。擬ぎ一いっるもの。欲蟹よくかに
と志しをくく開ひらふ毎まい六ろくの籍せきと損トつる。因いんえ。斬きの如ごく
告おぐる。ああらん。彼かれ仙せん今いま君脩きみのぶ。借たまと。蟹かにと。福ふくと。殊ことセ
一いっむと。巴や燒やき山さんの主す。波天はてん。ああらん。かかきき其その性せい正まさある。
べきや。邪よあるべきや。公きみこれ成ない。又また判ばんり。又またと向むかふ。
清正きよまさ霎ま時とき沈ちん吟ぎん。いろさま下さ締ぢ。疑うなづきと立たる。不ふ判ばん斷だんセ

もんもんばあるべくく。其そ性せい若わ不ふ頑がんくとく。ども原はら是い魚う
鼈うの如ごく。族ぞく。不ふ頑がんく。性せいよく。不ふ若わ不ふ端たん。也よ。他ほか年との澆う澆うと
察さ得とく。如ごう。も秋あき今いま自じ策さくともつて。禁戒きんかいの榜ぼう示しと樹じゆ
至いた。ベべーと。斧のこともつて。活木まきの裏うしろ面めんと。剛ごう面めんを墨すみくろ
くろと。四國しこくの民みん。不ふ害がいふを物もの。ハ清正きよまさ再さいび。これと殊ことをと。
書か死しされ。然もして主しゆ從じゆ二十七人じゅうしちじん。又また山やま民みん革かわ二十人じゅうじん。又また手て
と嘗なて。弓ゆと。下さり。教き持じの如ごく。又また始はじと覧ら。破竹ぱちく原はら。而て
走は向むかふ。一里いちりを。う。行ゆ。かかど。ス。これまで。邑東いとう。一山谷いがたにより
ハ百倍ひゃくばい嶮けい岨そよ。う。う。行ゆ。かかえ。了得りょうだい。又また強たけ騰とう。雪ゆきの加か道みちも。身み
体み。ああひ。又また瘦と生う。士し。又また芻こ。ふ。て。各かく体み足あしり。と。モ。ベべ。

をく頬のきらを勞なぐらふて羅休らくゆくほどふ。次取小樹木盤ちも木盤。つ。山やまうちも松まつむらとば。向むか室文むかわ周まわの如く咫尺ぢせきも雪ゆき。每まいがくうりうり。准じゅん伎ぎあくうる。松脂竹炬ひのきすのこ。ふふ手て小棒さめい。て撮照さくとう。行く。寒風かんぷう冷ひやき來きりて。残暑ざんしょの天あま氣きりづ。ことともあく。初冬はつとうは場ばるををと壊こして。手てふ持品も稍すこおとさんと。まると。あどふと。清正主從せいぜいしゆ大おほよ鷺さぎ。鷺さぎべ焚火かがり。と。燒やりて。と進すすまんと。宿間しゆまある。乾から岩いわ上うえ。裏裏うちうち。方邊ほうへんの枯木活損かくそん。山やまの如く。移うつして。炬のきの内うちと移うつ一つも。爆ばくく然ぜんと燒やる。記きす。各焚火かがりと。中間なかま。半時はんじをうり。手足てあしと温ぬる。且また好湯こうとうと二三合ふたさんあ。主從しゆ上下じやげ存する。饭めし了りり。今いまへ全く温ぬるりと。乞きもん。連伴れんぱん。树じゆと。傍そばり。案あわせと。諭しゆえ。二里にり又また町まちもある。あ

んとおがしき幽路ごろう。一への巖窟いわくつのゆき出でり。其そのへ老仙ろうせんの教えおしえ。然穴あなとりよへるきあらうと。赤星正斜あかほしと進すすみ。んうり。時々清正制せいぜいせいして。回まわく。遙洞とほのくつ入いて。熊くまと齧くる。と。決きしてこれと。擒とらべく。渠くが。食く。饼もち。腰こし。亦また。食く。ふべく。止と。制せい止しと。破はらば。軍法ぐんぽの如く。行ゆ。もと。嚴きびく。禁戒きんかい。進すすみ。行ゆ。と。十町じっちゆう。を。うり。那方ながた。返かへ。方ほう。改か。完ま。あり。て。いづきの徑へ。行ゆべきよ。や。返かへ。朝あさ。と。やどく。遂とが惑まどふ。い。うじ。ひせんと。往むかひ而へ。二三歳ふたさんざい。を。うり。ある。熊くま。破は。完ま。よ。至いた。か來くわり。首くびと。低ひくて。伏ふ。る。相あい。乳ちち。或もし。れ。も。る。よ。侶ともだち。うり。古いき。生う。と。視みる。よ。主おも計けい。頭かぶ正斜せいせき。と。生う。て。熊くま。よ。向むかひ。破は。竹原たけはらへ。導たどり。



隆正と後七月
八日、少尉一た
り十日、生え
八日、うちありさ
すれハ二日のか
とを、西生えま
る。

格セよと。りふ。其言語と聴聴してや。熊へ記て安もあが
ら屢あふかたと覗るふ。斯こへ導示みちしるべす。あらんと。眼まなこは陸りくひ行ゆ
とふ。りづあともあく東西とうい驛驛。酒熱さけぬくセせ。かくあり。清
正左右さきさうと顧て。送刃そり。好く確のぞむる。定さだて熊の食く餅もちあ
んぐ。今日吾脩われら。よ棲すみと借うけ。通とおさむ。恩賞おんしょうと。持
來きり。あと続つづ得えせやん。今持もち来る飯糧めんりょう。十日分じゅうにちぶんの糧くあ
ろ。うご十五じゅうご日ひと。入城いじゆう。先日小城ちいじゆう。が教おしえく。やあ。
三日さんじゆの糧くハ餘あ。べ。其そともて。熊くまは続つづべ。人ひと
も肩かたと休やす。豪ごう圓えん回まわ。儀ぎと続つづべ。とて柏原かしはら若わス弟おう。接つゝ
ひ左さ。手てを卸だせ。これ洞中とうちゆう。輶よ。安行あんぎゆ。と。も。や
りて行ゆ。踏徑みちへも。も。凸凹とうくう。あく。て。や。も。

と洞と脱出を

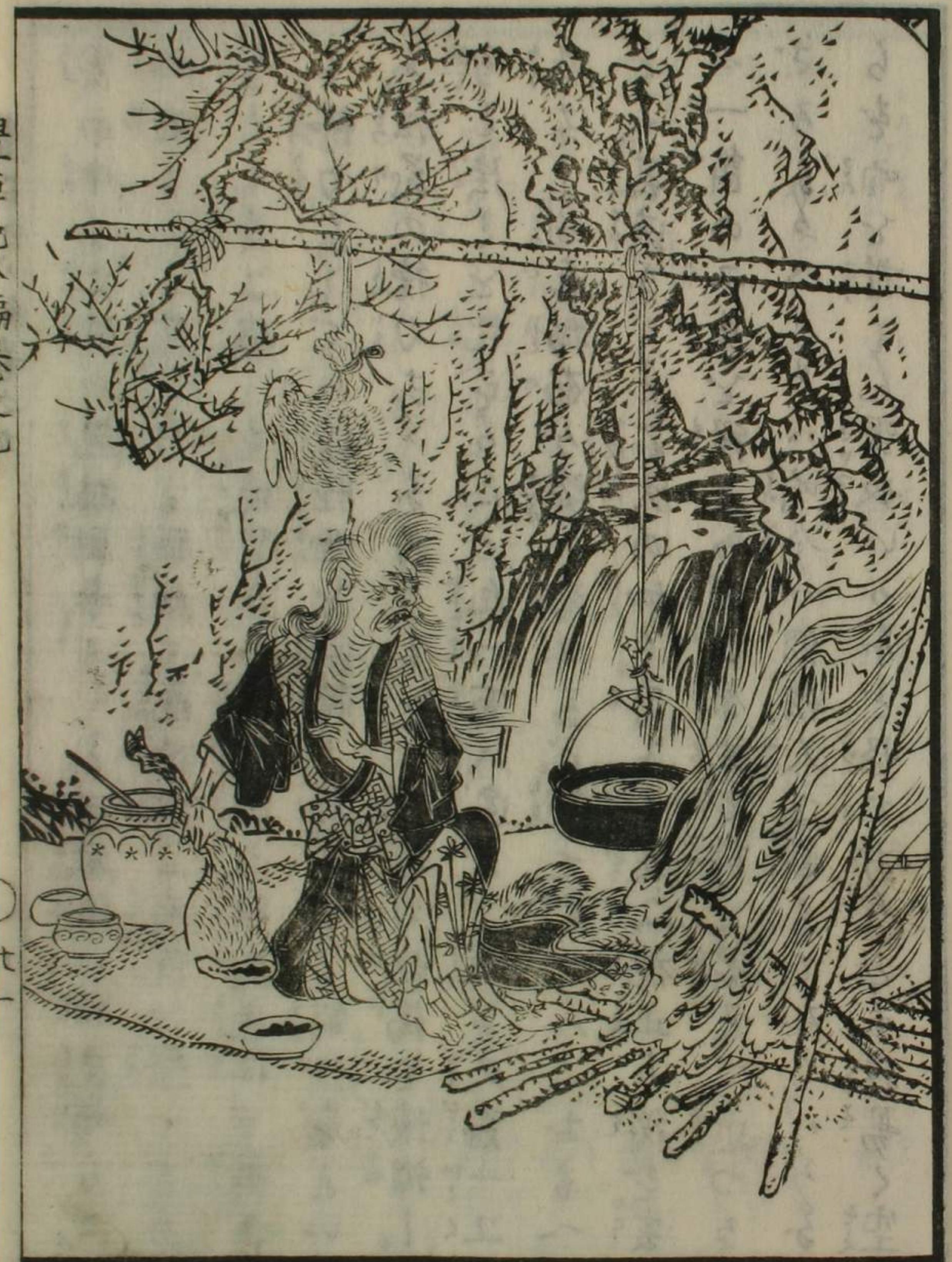
と洞と脱出たり
夜次破竹至邊大猶鬼一属。罩皮輒覗
相加へ熊と遠方の獸とひし張延ハ六雄將軍と有ると
いふ名もつて羅熊よあらどとそといへども能羅
熊の名とて賢よ近うりむるへ是る熊の徳とやい
えんろ斯て英雄三十人艱難辛苦よ身と碑き骨と粉
よして一塊ぢうりと行祚ふありもや) やく焚骨ふ向
向とまがるふ邊へ西北の山もく東南の嶺卑りとば
年矢の寒ぬよへ更々變り暑氣氤氳と驚天と驚て西天
詠よ紅暈ぬくり清正儼と曰方と名とば。勝る涼山めづ
らしく地面平よして天木莢の蔓縦横又生漫り時しも

初秋の央あとば。冥へ茶々と黃糸るゝと。木村井上安
ふがしよ。二四擣て食くると。清正ひ見て笑ひつ。山の
領よ呻らるゝあと。聆て漸く意属いうす。近邊が食奴
の扱戻ちる所あらん。よ／＼渠奴が性根と盪うさん
よ。此実と擣て焚よハ如ぞと聆侍へり。僕ありあば
あよふき幸あり。然モベーとて各々移搞採ゆらまくを
る。又自ハ己暮て徑見毎らねば。預て朝くる所あり。近國
は今宵ハ次と定ぐん。去來くも荷器と卸しぬとて。まづ
山民小食餅と炊ぐセ。これと喫して鼓腹ふし。手と展豆
と完げて大將ハ毛ヤ曲肱枕よ眠と其じ。憂鬱山とも熱
うをむう。僕又愉快熟寐やうとぬ。屬隨へる勇士連も。

右撲た撲よ甘睡して。夜と守りくるハ山民のとあり。お
そらの聲ハ只怖ろ／＼さ。入山の日より二日の今日モ
で。寐食の安き繆あらば。曉らんとしても唯昏くと。偶
眠バ寢をきて。若声と發し覚るあど。死もやもん懐思
あり。あおも稍子よ近くやあらんと。見てお風の冷ある
と。身よ綿とて覚えりとば。木村又彦同と覺し。焚残り
うち燎の大へ天木蓼の子と多くお薰べ。空瞻仰ば甲夜
又晴るゝ。碧天も月の陰て晝くと。左右ある際
殷くと遠夏幽よ鳴輝き最淒然天相よ。木村佐こそ怪物
が風ゑと招くものあらんと。まづ十條挺の多徳よ。大索
と左さんて暴雨よ濡さぬ小心とあし。主役の個くと何

ふよ。虚眠セー相あとバ。呻覺一もセぞ又羞宿。我も燎ニ
天木蓼推薰炉にて待とりども。新まへ文ニ秀えざ
セバ。木村大少もと住ち。那方遠方と見て行る。赤星秘
藏ふ。狩ねくる。熊の肉のあり。クミバ。彼肉焙て勾引出さ
んと。芭と聞キ。其の内。あり。クミバ。後顧をば。いつの
間。コヤ來り。クン。頭ハ雪と束ね。像く。齡八十とも残す
らん。クと。おがーき老女の腰うち。僂りて。熊の肉と隻手
不持。會釦もあげふ。喫在る。又益處る。ク。怪き怪物。唯一
撃と太刀。鞘振せば。忽然と。て消失。ク。其ハ毒猫。出
入りとて。清正。瓶井上。農本。飯田。赤星船。小園。提酒。勾原。
金改。記て。太刀。成長。戦多。曉得。ある。棟器。と。手。口。壁。と
て

握逼現出。あバ微塵ニヤんと。沫唾と呑て。待ぐ中スモ。大
將加夏清正。腰ニ付く。弦巻。ク。弦引。ク。一。推舒。一。
ス人張の柳牙形弓。懸て。上下の弦持。と。懦さんと。を
ベ。吓怪。一。矢。清正。も。擣る。弓張。下の。圓板。ク。拂断。と。切
く。驚き。あが。ふ。再び。弦引。一。て。手早。く。懸。秘薦。あ
た。八箇鷹の。蕪矢。と。丁字。口。搭て。加減。と。左。そ。再び。拂
断。と。強切。る。備。あ。そ。怪物。惱。懷。ふ。と。四。方。と。眺。と。視。你。と
荐び。現出。と。老婆。此。奴。面遁。さ。ト。射て。振らん。と。清正。ハ
三度。強。撃。モ。七十。人の。勇士。達。ハ。十。有余挺。の。多。挽。と。一
吐。コ。吐。と。警。発。モ。挽。の。响。と。一。齊。モ。兩。ハ。轆。軸。と。流。を。ぐ。如
く。霧。靈。ハ。百。千。一。時。又。山。裂。谷。も。崩。モ。を。ぐ。過。卷。卸。モ



雲の中。又丈餘の老猫翻奔。百練境の眼光眞らセ。跳廻ること。覺よりも猶活く。既次速々参院と警てども警とも身よ徹うぞ。遠方コヘお清正ゲ。昭彦老仙グ教ふ。佛力あらずてハ遠怪物と退転ト得ること能ひざといふ。法花の德力あらずありと。又法華の秘偈と傳循。弓と弦とと呪うること。凡一百八遍あり。時又益一ユ支。又。鳴毒猫面の姿と看せあべ。誓て刺さんとおもへども其速きこと石火の如く。因ふも定ム視止り得む。又小一箇のユ夫と役々ぬ。渠奴原束多勢と寝て近づさる。あるべくせば。鳴今一個傍人。又離れて在らば。うかるを唄と擅む。渠奴いわす。怪力ありとも。容易く空

ハ揚立まド。甚所と脱さば撃玉へと。つふと清正制一止め。新ハあとく。毫を修あらう。止まうべとりふをも。听うぞ。快勝准儀とりふまふ。五十步をうそ。走行天木。蓼林又突起て。猫よくと叫起る声ふ。夜じて一坡の裏。雲木村。木村。頭上に居ると。牙と叫びて。久慈。鬚。又。嘴。肩。強氣の木村おもへうそと。金剛力は。猫鬼が喉咽。左よそて。無頭と搏。下へ抜。大蛇。木村。戒刀の鞘と抜。下よそ大將清正。木村。又。義。あり。今迄一歩と射換ト。木村。身の上。拘るべ



と。法華の秘偈を口に呪い。八幡磨の薙矢と射符の箭の過るまで、まくまくと引後り。強音矢响最裂く。切て放てば禍と。猫が脇の末骨より。張肩骨の正中へ鑿と白く。射抜く。あとと等しく。木村又義製く。戒刀。鞘をも徹と。怒鳴一声刺串ぬけば。飽まで猛き怪猫も。咲と一呼。苦声と発し。喉とおで大地ふ墮ると。又義士も改却し。槍く。刀く。箭力と投せ。喉と擁て勤うセむ。墜ると。より井上鶴小園秀本。阿波。飯田各手足と繫と壓。捉滅多突。よ刺徹く。遂。手あく。刺止り。と。清正再び酒に向ふて。香櫞山と。天主。よあいて。寂地佛伏。次。よ。徳勇士と。弓らよて云やう。徳勇士の忠信義節よううて。浩る

大歎と。一時。ふ亡い。治国安民此上も。ふき歎森あり。己后ハ怖ろ。よ足ぞといへども。危。よ度ふ。全子熊谷。おもべ。心。矯慢。よ。漏る。め。自分の失と。畠をべ。今一懲と。憐ふありと。邪毒と。雨露と。掃ちんぐ。と。酒采出。と。おきと飲し。おも。志む。一休息。もるうち。ふ。曙色東。又向く。淳。ミ篠の連伴。破竹原と。辟生て。うの。若山の岬と。繞り。歩み。おぐ。又。膽仰。バ。僕人の活。よ。些も遠りば。一里も。ありと。おやう。き。蔓。經。櫻。乱纏。じて。さあぐ。山と。編。ぐ。如く。斧。鍔。と。かえて。武る。よ。幹。ハ。濃く。強り。と。バ。叉。鍔。の。些。も。通る。あと。あー。これともつて。橋。あど。よ。する。もの。あう。バ。利器。おー

と謂つべき不通の地といひよせんと行をつても二里
左ど東は遠とば。次オは巖角石肩聳ち。これと因狩くる
若葉蔓は。瘖は毒蛇の鱗は。鱗と難ぐる。おとく或へ糾ふ
等一くもて。毛足と刺さんと見る。あきば滑ある。緯萼の
如く。足根危く踏古く。汗と辛ふし津と苦ふ。岐山の
家不躋果セ。これより南を度下をふ。刪ろが如き。逆旅ふ
一て。督むぢづの壁巖。あどども。軍ハ渉は埋も。されば。
それと臂力は轉落人。主役三十有七人。老滿天。ゲ與え
くる。皮。頭脚と残らぞ。軍ミ。木村又義斜さんと。倒る
るよと見る。隠もあうせぞ。輦もくと。まろび。くる。一顆
鉢と落モグ。如く。瞬くうち。ふ各ヨ到りぬ。次ハ表本。井上

飯田次オは輶落ク。り。が。些も。毛足。は嶮。へ。あく。各卸立山
峯と瞻仰。左どよ。大將清正皮引縷ふて。輶。がんと見る。と。
小城下経。要時と推止。君今日の面相と観みて。まうる。不
眉毛。連立頬。考。女。く。毛乳。引。る。おと身。よ害。ある。相。不
い。切て。ハ皮。と。二三。放。堂。て。被。セ。玉。へ。と。て。下。縄。皮。と。推。歸
一。て。主人。よ。被。セ。一。り。心。中。ふ。祚。紙。と。念。ト。捨。り。ー。と。こう
へ。細。索。と。着。も。づ。く。と。操。下。タ。る。が。稍。十。丈。も。下。ろ。と。お
も。ふ。浩。る。而。ふ。旋。風。紀。り。西北の。多。暑。よ。り。大。轡。轟。然。と。轡
眞。あ。一。よ。ふ。汗。握。り。渾。身。ふ。膏。と。溼。て。燒。忙。き。上。る。ふ。も。上
得。ぞ。下。ろ。ふ。も。下。得。ぞ。下。縄。ハ。一。心。不。亂。よ。神。よ。誓。て。細。索。

と斬て放一て戒刀掣投轡の眼へ撃る。あきより先に
竜反立本背負ひ。多繞推捉て大轡回頭覗ふたり。茲は不
思儀や山岳忽地。功勳あ。致百の大熊。大方。下り走り出。
輶行清正と。お七段にて嘔止走りもやらむ。驚くと下。
の方へ即記べ。こそぞ正しく熊穴へ残狼と放置たり。恩
と報せと見え。琴下り。大轡へ。続と刀と振ひ落し。つづくともあく失う。佐勇士殺て安途あ。
ろく。然へ清正と。各弓へ即して忽地。又。金走散て身と
潜り。へ。狹ふ遠方の獸。あんぬ。左右主従三十七人。山
谷輩。ナシ。無事。下得て。返。冷汗と拭ひ。へ。毫ふう
う。緯。ナ。ありり。

